

詩人的英雄：論説

著者	兒島，献吉郎
雑誌名	龍南會雜誌
巻	9 0
ページ	1 1 - 1 5
発行年	1902-02-15
URL	http://hdl.handle.net/2298/5295

糧を對馬に送るや。海上逆風に遭ひ。人畜糧穀盡く漂失するに至れりと云ふ。されば清和朝貞觀十八年。在原行平太宰權帥と爲るや。上奏して「自古來舟航艱難。歲中漂沒。十之六七。故運輸之國。人民太減。檢領之島。糧儲常空」と云ふに至れり。抑も當時管下六國より一歲運ぶ所の防人年糧は。穀二千石外に運搬に要する雜用料穀。綱丁柁工水手等の糧穀。亦穎三万四千五十束以上に達するも壹岐島の如きは課丁二千人。皆油雜穀等を朝廷に進むるの制なり。況や壹岐は口分田の外尙水田一百町あり。之を耕して直に對馬に送らば。其運搬の利便將た幾何ぞや。是に於て在原行平は。從來壹岐より貢せる雜油雜穀は。六國より代輸し。壹岐島產額を以て防人の年糧に充てんどの議を奏し。朝廷も二年間を限り。試に行ふべしと令し給ひしも。其事遂に行はれず。元慶三年に至り。太宰府は更に奏して。壹岐の營田其利少く。轉漕亦困難なるを以て。營田を廢し。舊に依り六國の正税を運漕せんことを請ふに至りしも。是より後海防漸く衰へ。史乘徵するに由無し。以上防人の制度一般に涉り。其大要を叙述したり。然らば其實際に於る功績は如何なりしか。そは更に後篇に於て之を叙述すべし

(前篇完結)

詩 人 的 英 雄

教授 兒 島 獻 吉 郎

滔々たる今の天下、何ぞ詩人の多きや、何ぞ英雄の多きや、しかも其詩人の過半は僞詩人なり、其英雄の多數は僞英雄なり、僞詩人は文學の蠱なり、僞英雄は國家の賊なり、蓋し詩人の頭腦は眞美ならざるべからず、純善ならざるべからず、然るに今の僞詩人は心事陋劣に

して淫靡の風に染み卑猥の詞を弄ぶものなり、務めて狹斜の巷に出入して遊冶嬌媚の態を寫すものなり、下宿の二階に閉居して高利貸の窮迫に兜を脱ぐものなり徒に花鳥風月を咏して古人の句を剽竊盜襲するものなり、人の秘密を暴露して名譽を毀損せんとするものあり、黨同伐異互に相猜疑し、相陷躋して反目嫉視吳越も雷ならざるものなり、是れ今の詩人の過半は迂濶陳腐無用の愚物に非ざれば欺騙、脅迫、破廉耻、不道德の罪人たらんのみ、

英雄の襟懷は光風霽月の如きものなり、落々として天地を貫くべきものなり、然るに今の偽英雄は情性を縦にするものなり、血氣を假るものなり、放言高論するものなり、財利を貪りて鑿くことを知らざるものなり、外、豪宕にして、内陰險なるものなり、口に蜜ありて、腹に劒あるものなり、是れ今の英雄の多數は驕慢、剛愎、恣睢の暴人に非されば險賤、兇惡、劫掠、盜竊の姦徒たらんのみ、思ふに三十一字を五七調に並へたればとて必ずしも詩人に非ず、二十八字を二四不同、二六對の法に由りて組立たればとて必ずしも詩人に非ず、下手なる新体詩、異態なる俳句を作ればとて必ずしも詩人に非ず戀愛の神聖を説きて東家の處女と穴隙を鑽ればとて必ずしも詩人に非ず、狂氣無くれば絶大の詩人たる能はずとて萬事不規律、無頓着なるもの必ずしも詩人に非ず詩人は靈の人なりとて家には飢に泣く妻子と、寒を啣つ父母とあるも晏如として一笑に附し去るもの必ずしも詩人に非ず、眞の詩人の資格は眞美純善にして神聖なるに在るなり、暴虎馮河必ずしも英雄ならず、膚撓ます目逃かざるもの必ずしも英雄ならず、酒を飲むもの必ずしも英雄ならず、色を好むもの必ずしも英雄ならず虱を捫りて時事を談するもの必ずしも英雄ならず、牛肉屋の樓上に一飯斗米、肉十斤を平くするもの必ずしも英雄ならず、書は姓名を記するに足ればとて觀な一丁字なきもの必ずしも英雄

ならず、眞の英雄の資格は高明卓犖にして卑俗ならざるに在るなり、

嗚呼今の僞詩人よ、何ぞ汝の淫心を去らざる、何ぞ汝の媚態を革めざる、汝の詞藻は社界の風紀を亂すもの多きに非ざるや、汝若し汝の陋劣卑猥を去らんと欲せば姑く彼の英雄的詩人を學べよ、

嗚呼今の僞英雄よ、何ぞ汝の假面を脱せざる、何ぞ汝の狂態を悛めざる、汝の行動は社界の秩序を紛亂するもの多きに非ざるや、汝若し汝の辟遣乖戾を矯めんと欲せば姑く彼の詩人的英雄を學べよ

蓋し今の世に詩人的英雄なきなり、今の天下に英雄的詩人なきなり、試に之を古の人に求むれば魏の武帝曹孟徳の如きは即ち英雄にして詩人なるものなり抑亦詩人にして英雄なるものなり、彼は決して今の英雄が文學的趣味を解せざるものの比に非ず、又決して今の詩人が國家的觀念を失へるものゝ比に非ざるなり、請ふ予をして曹孟徳に就て論せしめよ、

「天下の英雄は使君と操とのみ」とは、是れ曹孟徳が劉玄徳に向つて言ひしものなり、何ぞ其言の傲岸なるや。「梁を横へ詩を賦す、固より一世の雄なり」とは、是れ蘇東坡が孟徳を評ししものなり、何ぞ其評の俊爽なるや、顧ふに彼は實に東坡の所謂一世の雄たるなり、彼自身の所謂天下の英雄たるあり。砲煙彈雨の間に立ちて、胸中閑日月あるは、古今幾多の英雄中、多く其比を見ざる所なり。故に三十餘年身を兵馬倥傯の中に投玄ながら、一日も手書を釋てず、晝は攻戰を事とし、夜は經傳を講じ、或は高に登りて詩を賦し、之を管絃に合せ、陶然として復た敵國外患あるを知らざるものゝ如し、或は飛鳥を射、猛獸を擒にし、優遊として老を忘れ身を終ねんとするものに似たり、且彼は草書を善くすること崔瑗、張芝に譲らず、音樂に長むること桓譚蔡邕に匹し圍棋に巧なると王九真、郭凱に埒しかりき、蓋し周公の多才と孔子の多能とを以てするも、恐くは彼の多藝に及ばざるへし、明

の張遼は彼を評して孔融の文と呂布の武とを兼備せるものなりと言へり、こは人物品性上の比喩を失するものなりと雖も、彼の才能上文武を兼備せるは亦掩ふべからざるの事實なり、孔融は天資高明なりと雖も其の度量弘大ならず、決して孟徳の氣鋒才略一世を蓋ふものと一概に論すべからざるなり、呂布は脅力人に過くと雖も其器亦少なるかな、決して孟徳の眼中人無きものと一槩に論すべからざるなり、顧ふに孟徳は亂世の功臣なり、治世の亂臣なり、前には草賊を戡定して漢室の功臣たりしも、後には天子を刳制して天下の逆賊と爲れり、故に天下を定めしものは彼なり、天下を亂せしものも彼なり、彼は幼より機警にして權數あり、好んで俠客の風を修めて生業を事とせざりき、然るに彼は二十歳の時、孝廉に擧げられたり、孰れか知らん異日漢室の大逆賊がこの孝廉の人たらんとは、然れども彼は當初より篡奪の志ありしに非ず、彼が始めて兵を起しは董卓廢立の罪を正さんが爲めなり即ち彼は亂を鎮めんとするものにして、亂を起すものに非ず、故に當時彼の志望は殊勳を立て征西將軍と爲り、死後墓道に漢故征西軍曹の墓と題せらるゝに在りしのみ、

述志令云、歸鄉里於譙東五十里、築精舍、欲秋夏讀書冬春射獵、求底下之地、欲以泥水自蔽、絕賓客往來之望、然不能得如意、後徵爲都尉、遷典軍校尉、意遂更欲爲國家討賊立功、欲望封侯作征西將軍、然後題墓道言漢故征西將軍曹侯之墓此其志也

又彼が天子を挾みて四方に號令せんとするには當時袁紹、袁術、劉表等皆僭越不遜にして、各已に一方に虎踞すればなぞ、されば彼が東征西伐して河北を平げ、荊州を下し、關中を定めて、遂に宰相たるに及び、彼は周公の吐哺握髮を以て自ら期圖したりしものゝ如し、故に彼の短歌行に曰く山不厭高、水不厭深、周公吐哺、天下歸心、其後彼は益自ら其根柢を封殖して、竟に天下三分の業

を爲すに及び、彼の野心は愈増進して文王を以て自ら期圖したるしが如きは寧ろ其不倫を笑はざるを得ずと雖ども彼は尚ほ漢室を翼戴するの意ありしことは述志令及短歌行を見れば章々として明白なり

要するに彼が周公を以て自ら任じ、文王を以て自ら期し、或は齊桓晉文が周室を轉覆せざりしを稱し、或は樂毅蒙恬が故主を圖らざりしを賛したるが如きは皆彼自身に漢室を忘れざるを見はしたるものなり、然れども是れ果して彼の中誠より發したるものなるか、或は一時の權略に出て、所謂英雄欺人的手段に非ざるか、彼が孔融に誅し、荀彧を自殺せしめたる如きは、彼の眞性決して寛厚慈仁に非ざるを知るべし、又その包容の德兼懷の量なきを証するに於て餘りあるなり、然るに荀彧、郭嘉、荀悅、仲長統等皆絶世の才略と學識とを具へながら、しかも皆彼に心服して彼の爪牙と爲りしものは、全く彼の武略一世に超越して、能く人心を收攬するに足るものあるも亦一方に於ては彼の文才一世を凌駕して能く一代を風靡するものあればなり

倫理問題の解決と吾人が信念

倫理問題の解決は、我國目下の大問題なり。敢て吾人の信念を述べて、之を論ずるが如きは、自ら揣らざるの甚しき者なりと雖も、學生間の風潮は、吾人をして、止むを得ざらしむる者あり。何ぞ顧みて、逡巡するの違あらんや。若し、夫れ此の論文にして、幾分にも、讀者に倫理問題の解決を促すに足る者あらば、吾人の希望は、十分に達せられたるなり。二十世紀の劈頭に於ける我國基

牧 羊